

Title	塚田孝・吉田伸之編：『近世大坂の都市空間と社会構造』
Author	井戸田，史子
Citation	市大日本史. 5 卷, p.182-190.
Issue Date	2002-05
ISSN	1348-4508
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	

Placed on: Osaka City University

【書評】

塚田孝・吉田伸之編

『近世大坂の都市空間と社会構造』

井戸田 史子

本書は近世大坂研究の発展を目的としたものであり、その特徴は次のような研究方法にある。

その第一は、歴史学だけではなく建築史、経済史、文化史、考古学といったそれぞれの分野から近世都市大坂にアプローチしている点である。第二は、従来の政治・経済史の側面に加えて社会Ⅱ空間構造論を導入している点である。これは都市空間のあり方と社会構造を関連させて考察すると同時に、都市を分節的に把握した上で大坂の全体構造を説明しようとする方法である。

こうした方法は本書の編者であり近年の近世都市研究を牽引している吉田伸之氏と塚田孝氏が中心となり、互いの論理を取り入れながら創出した方法であり、それはとくに巨大都市の全体構造を解析する際の有効な方法となっている。

以上のような巨大都市研究の方法には三つの研究段階があるという。第一は各社会集団の特質を具体的に解析する基礎段階、第二は諸社会集団間における重層と複合の關係の特質やその構造を明らかにする段階、さらに第三は、第二で明らかにした關係構造を対支配権力、対民衆世界との關係を含めた社会構造の全体像を叙述する総合化の段階で

あるという。

この三つの研究段階は、一九八〇年以降の近世都市研究の動向すなわち一、都市の内部に踏み込んだ研究段階、二、重層と複合論の展開した段階、三、支配・従属關係を孕む社会Ⅱ空間構造の分節的把握の方法が提唱されるに至った段階に対応しており、現在の近世都市研究の水準を生み出している。

以上、本書の特徴についてみてきた。次に表1によって本書の構成をみると、はじめに塚田孝氏が近世大坂研究の課題との関連で本書の目的を示した上で、都市空間、芸能興行、株仲間の三部に計九本の論考が収録されている。さらに八木滋氏が近世大坂について研究史を検討しており、吉田伸之氏が社会Ⅱ空間構造論の展開と本書の成果との関連を述べている。また、九本の論考は大坂の分節構造に即して言えば町人地と新地に集中しており、分野別では歴史学を中心として考古学や建築史、国文学などである。

次に各論文の概要とそれぞれについて若干の私見を述べたい。なお、塚田孝氏、八木滋氏、吉田伸之氏の論考については本書の全般にわたる内容であるので、各論文の関連する部分で触れることを予めお断り

表1、本書の構成

部章名	論 文 名	執筆者名	分節構造	分野
第I部	都市史としての大坂—刊行にあたって 都市空間	塚田 孝		
1章	近世大坂の町屋—発掘調査の事例から	松尾信裕	町人地・ 町屋空間	考古学
2章	近世末・近代初頭の大坂北船場地域 における集住構造と職住形態	谷直樹・ 三浦要一	"	建築史
3章	萩藩蔵屋敷と大坂市中	森下 徹	町人地・ 蔵屋敷	歴史学(流通史・ 経済史)
第II部	芸能興行			
1章	蟬丸宮と説教日暮	阪口弘之	新地・芸 能空間	国文学
2章	近世大坂における浄瑠璃興行—天保 改革をめぐる	神田由築	"	歴史学(文化史)
第III部	株仲間			
1章	大坂における唐・和菓種の取引と仲 間	渡辺祥子	町人地・ 株仲間	歴史学(流通史・ 経済史)
2章	箱館産物会所と大坂魚肥市場	原 直史	"	歴史学(流通史・ 経済史)
3章	近世大坂三郷酒造仲間の構造	屋久健二	"	歴史学
4章	近世大坂三郷家請人仲間について	西村和江	"	歴史学
	近世大坂研究の現状と課題	八木 滋		歴史学
	編集に参加して	吉田伸之		

しておく。

第I部 都市空間

第I部は前にも述べた通り社会空間構造論をめざす本書には欠くことのできない部門である。

松尾論文

松尾信裕氏は考古学の立場から都市の再生産力や住人の生活を考察し、近世都市大坂の変容を明らかにすることを目的とする。

それによると第一に文献史料の乏しい江戸初期の大坂の成立について明らかにし、第二に家屋敷の構造を究明している。これまで歴史学では主に水帳や絵図を分析することによって家屋敷の構造を明らかにしてきたが、これらが残されている地域は少なく、たとえ残っていてそこから家屋敷の間口や奥行きなどの少数の情報しか得ることができない。これに対して発掘調査の結果からは、敷地内の建物配置や建物の細部に関する情報などを知ることができる。さらに絵図類からはある一時点の状態しか知ることができないが、発掘調査は同一地域の家屋敷空間の利用内容の変遷がわかるのである。

このように考古学的手法による成果は非常に大きい。しかしながら若干の問題点も含んでいるように思う。たとえば出土品によって、道修町に菓種業関係の者が多く居住していたとするが、これらは歴史学でもすでに明らかにされている事柄であり、近世考古学と歴史学の成果を一層連関させる必要があるように思う。この点について八木滋氏の指摘が参考になる(三〇〇ページ)。氏は蔵屋敷跡の発掘調査と近年の蔵屋敷の成立に関する研究を結合させることで諸大名が大坂に所持する屋敷の性格とその変化を究明することが可能ではないかとする。このように近世考古学と歴史学の複合を今後一層活発にしていける必要がある。

谷・三浦論文

谷直樹・三浦要一氏は、建築史の視点から主に明治十九年「建家取調図面」を題材に近世末期から近代初頭の大坂(坂)都心部における住民の集住構造と職住形態との対応関係を考察している。

本論考の意義は建築史と歴史学からアプローチを行い、個別町を丁寧に分析することによって、北船場地域の隣接した町々でありながら各町の差異を明らかにしていることにある。とくに平野町において裏長屋の比率が高い構造になっているという指摘は、従来北船場地域は大商人が軒を連ね、裏借屋層は同地域から外縁部にはじき出されていたとする通説(註)に疑問を投げかけている点は傾聴に値する。(註)

このような大きな成果の一方で若干の課題もあるように思われる。歴史学では一九七〇年代後半に大坂の数ヶ町を事例として取り上げ、各町の家持と借屋の比率や人口動向を分析して、地域の階層状況を考察している。(註) 谷直樹・三浦要一両氏の歴史学的分析はこの手法に似ているといえる。両氏は各町の人口やそれに占める奉公人人数、住戸密度などによって各町の特徴を数値で表してモデル化している。もちろんモデル化することも必要だが、近年の歴史学ではそれによって捨象されてしまう事柄、たとえば豊かな民衆世界を築いていた裏借家人の存在形態や、家屋敷を基点とした人間関係にまで踏み込んだ研究が行われている。今後このような関係論と建築史上の方法論との複合を図っていく必要がある。

森下論文

森下徹氏は建築史的な空間構造の分析と歴史学の関係論を巧みに複合している。その内容は蔵屋敷を都市社会の中に位置づけることを目的として、蔵屋敷が大坂市中と取り結ぶ関係を考察し、さらに江戸藩邸の研究を参考にしながら大坂固有のあり方にも着目している。

これによると蔵屋敷の空間が有力な商人から家守、中仕に至るまで何重にも利権化されているという。また氏は自覚的に空間構造の分析と社会関係の考察を相互補完的に行っている。たとえば三種類の絵図を詳細に分析することによって、蔵屋敷が蔵や小屋からなる本体部分と貸家部分の二重構造になっていたことを明らかにしている点などがそれである。

また江戸の藩邸との相違点についても究明している。すなわち大坂における蔵米の取り扱いが蔵屋敷内で完結しなかったことから、蔵屋敷の中仕は専属でありながらそれに完全に取り込まれない構造を有していたとする。また蔵屋敷が町人地にあることから、特定の藩の廻船引き受けを目指した船宿が集団化し、それが蔵屋敷地の家守を務めるという特異な関係が生じ、さらに蔵屋敷の家質化が起こると位置づけられている。このように大坂に存在する蔵屋敷の固有性とその多面的な性格を明らかにした点は注目される。

第二部 芸能興行

塚田孝氏は本書にこの部を設けた意義を都市の分節的把握の観点から新地・芸能空間を明らかにすることにあるとしている(二二ページ)。しかしこの部の意義はそれだけではないようである。なぜなら都市の研究書の中に芸能史の分野が含まれるようになったのはそれほど古いことではなく、それは九〇年代前半における身分的周縁論の誕生からである。この中で雑多な芸能民が身分的周縁として捉えられ、芸能集団の存在形態が具体的に究明され、それらが存立する「場」の特質や他集団間の社会関係が明らかになってきた。これによって芸能史研究は近世都市を捉える重要な要素になったのである。

しかしながら近世大坂についてはこのような都市史と複合した芸能史研究はまだはじまったばかりであり、この点からも本書に芸能興行の部が設けられた意義は大きい。

阪口論文

阪口弘之氏は国文学の視点から、説教日暮の栄枯盛衰を諸国説教者との関係に探ることを目的としている。それによると諸国説教者支配は初め蟬丸宮社役であった兵侍家衆が行っていたが、正徳期(一八世紀前半)頃から三井寺が行うようになったとしている。さらにその支配は蟬丸宮(三井寺)―日暮小太夫・八太夫―諸国説教者というように日暮を諸国説教者の元締的位置に置いて行われていたことを明らかに

にしている。

日暮が諸国説教者の元締め的位置にあったことは興味深い指摘である。しかし残念ながらその「元締」の具体的内容については述べられていない。今後、日暮と説教者集団の関係を明らかにしていく必要があるだろう。また日暮と蟬丸宮との関係や悲田院との関係、諸国説教者の存在形態なども今後の研究課題となろう。

神田論文

神田由築氏は天保改革前後の浄瑠璃興行の動向を通じて近世大坂の都市空間Ⅱ社会の構造を究明するために、興行場所、興行の座組、上演形態を明らかにしている。

それによると興行はある一定の期間を特定の紋下が勤めており、座組編成は師弟関係と興行場所という二つの要素によって決定していたとする。また浄瑠璃渡世集団は、天保改革による宮芝居と人形芝居の禁止という事態を打開するために、素人や若手の興行場所であった寄席という空間と、人形を含まない講談調の「忠孝昔物語」や「影絵」芝居、「みどり」形式の芝居などの上演形態とを本来の興行の代替として緊急避難的に見出し出したという。そしてこの空間と形態はやがて常態化し、改革終了後も新たな興行場所と形態として確立したことを明らかにしている。

また従来江戸では太夫・三味線・人形遣いは別個の集団であり、天保改革中に太夫が寄席の素浄瑠璃に出演したことが人形浄瑠璃芝居の

集団を解体させる一因になったとされる。これに対し氏は、大坂では新たな興行場所と上演形態が人形芝居を取り込み、人形浄瑠璃芝居として存続していったと位置づけている。

このように天保改革による興行場所・上演形態・渡世集団の変化が、改革前↓改革中↓改革後といった一連のプロセスの中で動態的に捉えられている。また江戸との比較で大坂の固有性が明らかになっているといえる。これによって近世大坂についても身分的周縁論の視点から芸能興行の問題を考察する研究が本格的に始まったといえよう。

第三部 株仲間

株仲間の研究は一九八〇年代までは商業史の視点や幕藩制構造論の一環として株仲間の経済的側面や幕府の経済政策との関連について研究されてきたが、その活動の場が都市にあるにもかかわらず、どちらかというと都市史とは切り離されて論じられてきた感がある。株仲間が都市史として位置づけられる画期となったのは、八六年の今井修平氏の研究である。⁹⁾氏は株仲間が地縁的結合の町共同体とは別次元の社会集団として存在していたことを明らかにした。その後、塚田孝氏は株仲間を一つの社会集団として捉え、その構造分析と他の社会集団との複合関係を分析する必要性を述べられた。⁹⁾この部の四論考もこの重層と複合論を前提に仲間の構造を究明している。

渡辺論文

渡辺祥子氏はこれまで唐薬に比べて和薬種の取引に関する研究が少ないことから、和薬種を含めた薬種取引全体の位置づけを目的とする。それによると享保七年（一七二二）における和薬改会所成立以前は、唐薬・和薬は取扱者や流通経路に重複があり、問屋―仲買―小売のよりに単純な流通構造ではなかったという。また和薬改会所が設置されると「改め」は「中買仲間」が行うようになるが、彼らは問屋のように荷物を集積しないので「改め」を行うには構造的に無理があったという。そのために「改め」は問屋が行うことに変更されたとする。すなわち複雑な流通構造が存在した大坂において集中的にこれを掌握するような組織を形成することは難しく、最終的に改会所は廃止されたとする。

このような一連の動向から、氏は公儀による政策を梃子として自らの利権を確立しようとする「中買仲間」のあり方を描き出している。その方法は単に商品の流れを追うのではなく、取引に関わる商人のあり方に視点を置く方法であり、これによって大坂において和薬改会所が存続しなかった原因を解明している。

また「商人」という史料用語に着目することによって唐薬問屋・和薬問屋・諸問屋・中買仲間・薬種以外の商品も扱う商人・薬種小売・せり売商人など薬種の流通に関わる多様な存在を抽出している（一五〇ページ）。このように史料を丁寧に解釈する氏の姿勢には学ぶべき点が多い。

原論文

原直史氏はこれまでに干鯛が房総半島の産地から江戸・浦賀の干鯛問屋にどのように送られるのかという課題について、浜方の荷主や荷継宿・運送宿・問屋との関係や駄賃稼ぎの実態、江戸を中心とした市場のあり方などの研究を蓄積されている。また最近では大坂の魚肥流通の中核であった鞆干鯛屋仲間とその周辺に位置する東組松前問屋について、その業態や仲間結合の特質、仲間の相互関係などについても検討されてきた。

本論考では株仲間解散期においても鞆地域と干鯛屋仲間の求心力が強固に維持されていたことを考察している。しかし幕府の箱館産物会所の仕法と松前産魚肥の比重の増大という変化にもなつて、鞆地域と干鯛屋仲間の求心力は低下していき、それに代わつて松前問屋が進出するとしている。そして松前問屋は会所附仲買に、鞆干鯛屋仲間は松前問屋から産物を買取取る干鯛仲買として一面的に位置づけられ、両者の力関係が逆転していく様子を考察されている。

氏は近年の社会集団や都市の研究の発展を前提に、これと従来の流通史の研究を結合させることによって、物流の担い手のあり方や「場」の性格などを究明し、近年の流通史研究を進展させているといえる。

また社会Ⅱ空間構造論によって鞆地域の空間構造と干鯛屋仲間の構造が統一的に論じられているといえる。しかしながら若干の問題点を挙げると、氏の江戸における干鯛市場の詳細な空間構造分析に比べると、本稿における鞆の空間構造は個別町や家屋敷レベルにまでは及ん

でないと見える。史料制約によるものであろうが今後の研究が待たれるところである。

屋久論文

従来、享保期（一八世紀前期）以降の酒造業は灘地域の発展とこれに対する大坂の衰退という構図の研究が行われてきた。屋久健二氏はこの構図自体は否定しないが、この通説によって大坂三郷酒造仲間の構造や都市社会における位置づけまでが閉ざされてしまうことに懸念を抱いている。このような問題意識によって大坂三郷酒造仲間の構造、株の性格、年行司の存在形態について考察している。

それによると酒造仲間が、酒造株を大量に集積する年行司層と、借株の酒造家に二極分化しているという。また本来禁止されている借株は、酒造株譲渡という体裁を取りながら巧妙かつ広範に展開していたという。

氏の研究の特徴は従来捨象されてきた事柄を一つ一つ解明しようとする姿勢にある。例えば大行司とその他の年行司の任期の違いという些細な事柄から両者の根本的な性格の違いを導きだしている。

また本論考には重要な論点も含まれている。それは株仲間の本質についてである。一般的に株仲間は初め株主Ⅱ経営者の共同組織であり、後に所有と経営の分離が進むと株主の共同組織となるとされる。しかし塚田孝氏は、茶屋株が初めから貸すことを前提に所有と経営が分離している特殊な性格であり、茶屋仲間は茶屋株主の共同組織とはいえ

ず、茶屋株非所持者を含む共同組織であったとしている¹⁰⁾。このように特殊といわれる茶屋仲間の構造と酒造仲間のそれは共通する点が多い。酒造仲間は禁止されているにもかかわらず、実態的には借株の酒造家が広範に存在しており、酒造仲間には株非所持者も含まれている。また株仲間への仲間入りの出銀も酒造株を取得することによって生じるのではなく、実際に酒造を行うことによって発生している。これらの理由を幕府に統制されていた米を原料とする酒造業の特殊性とのみ求めることが可能だろうか。この株の本質についての問題は今後の課題であるといえる。

また恒常的かつ広範に存在した借株に対する幕府の具体的対応策など、幕府の都市政策との関連で動態的に考察する必要があるだろう。

西村論文

西村和江氏は従来、家請人仲間が借家人の視点からしか捉えられていないことを指摘し、家持・借家人・町奉行・家請人の立場から家請人仲間を多面的に捉えることを目的としている。また借家人の階層性にも注意を払う必要があるとしている。

これらによると家請人仲間が不埒な借家人に対する家明け渡しへの催促を等閑にし、小屋入りの者たちを小屋から早期に追い出していたことから、彼らが都市社会の公共性を担っていた側面も持つが、本質的には営利的な集団であると位置づけている。また家請人の請持場所が家屋敷単位であり、請持場所の権利は家請人同士で譲渡されていたと

いう。さらに裏借家層が同家・別宅を繰り返し、三郷を点々とするような流動的な層であることも究明している。

裏借屋層などの都市下層民の研究は、彼らが史料を残さないことからその研究が難しいが、氏は家請人仲間を切り口にするることによって都市下層民の実態に迫っているという点で高く評価できる。

しかし史料の制約からか家請人仲間の構造はあまり述べられていない。また小屋の具体的な経営の内容や、幕府の都市政策との関係など、今後の研究が期待される。

おわりに

以上、各論考についてそれぞれの概要と若干の私見を述べてきた。以下、本書の課題についてまとめてみるが、これは同時に近世大坂研究の課題でもあるといえる。

第一に歴史学と他の分野との統一方法を一層充実させる必要性を感じる。たとえば考古学や建築史と歴史学を有効に複合させるには、家屋敷単位レベルの空間構造の究明と、家屋敷を単位とする人間関係を考察する社会構造分析を統一に行わなければならない。また歴史学と芸能史・国文学を複合するには、塚田孝氏が指摘しているように、芸能史や国文学の先行研究が外から眺められた状況論的歴史叙述をしている場合があることを自覚した上で研究を行う必要があるといえる¹¹⁾。

第二に、絵図の残っていない都市域における空間構造の解明をどの

ように行うのかという問題である。本書の収録論文においても絵図の有無が、空間構造の解明の差に反映しているように思う。評者は町に残る家屋敷の売買の記録と、家持と家守による連判状の連判順などを基に町の空間構造を復元したことがある。⁹² 絵図が残されていないなくても空間構造の復元を常に心がける必要がある。

第三に都市政策との関係を明らかにしていく必要性が挙げられる。社会集団の構造の変化や他の社会集団との関係の変容は、幕府の都市政策と複雑に関連している。本書でも神田由築論文では幕府の天保改革による芸能集団の変容が解明され、渡辺祥子論文では幕府の和菓改会所の設置が菓種仲間に与えた影響が明らかになり、原直史論文では幕府の箱館産物会所の仕法に伴う干鯛屋仲間の変容が究明されている。このように社会集団を動態的に捉える必要がある。

第四に分節的把握の第二段階とされる研究の充実が挙げられる。八木滋氏は、近年の近世大坂の研究が数の上では蓄積が進んでおり、それが大坂の全体像を描きうるまでには至ってはいないものの、その準備を着々と進めるものになっていると評価されている(三〇〇ページ)。このように近世大坂研究は進展してきているといえるが、今後さらに個々の社会集団の構造を具体的に究明し、社会集団間の重層と複合関係を明らかにする研究を充実させる必要がある。またそれは町人身分の研究だけではなく、武士身分や宗教者、えた・非人身分などの研究も行われなければならない。

第五に近世大坂の全体構造の解明という課題が挙げられる。吉田

之氏という分節的把握の第三段階「分節的把握の総合化」である。本書も含めて近世大坂の個別研究は徐々に蓄積されてきており、その内容も多岐にわたってきている。これらの蓄積を統合して、近世大坂の全体構造について考察しなければならぬ段階が近づいている。しかし社会構造の細部を考察することなしに性急に答えを求めるのではなく、本書で行われているような構造分析を丁寧に積み重ねていく必要があるといえる。

以上、本書に即して近世大坂研究の課題をまとめてみたが、本書の論点は多岐にわたっており、筆者の力量不足から誤った評価をしている点もあるかと思う。その点をご寛恕を請いたい。

注

- (1) 朝尾直弘「近世の身分制と賤民」(『部落問題研究』二六八号、一九八一年、後に『都市と近世社会を考える』朝日新聞社、一九九五年に収録)を参照。
- (2) 「社会集団をめぐって」(『歴史学研究』五四八号、一九八五年、後に『近世日本身分制の研究』兵庫県部落問題研究所、一九八七年に収録)を参照。
- (3) 「巨大城下町―江戸」(『岩波講座日本通史』一五巻近世五、一九九五年、後に『巨大城下町江戸の分節構造』山川出版社、二〇〇〇年に収録)を参照。
- (4) 乾宏巳「大坂町人社会の構造―人口動態における―」(津田秀夫編「近世国家の展開」塙書房、一九八〇年)を参照。
- (5) 拙稿「宝暦―天明期における大坂の町と職業集団の構造―北久宝寺町三丁目を中心として」(『ヒストリア』一五五号)においても、北船場地域に裏

借家層が滞留している状況を指摘した。

(6) 注4に記した乾宏巳論文を参照。

(7) 塚田孝他編『身分的周縁』(部落問題研究所、一九九四年)。久留島浩他編『シリーズ近世の身分的周縁』一〜六巻(吉川弘文館、二〇〇〇年)を参照。

(8) 『近世都市における株仲間と町共同体』(『歴史学研究』五六〇号)。

(9) 注2に記した塚田孝論文を参照。

(10) 『近世の都市社会史—大坂を中心に』(青木書店、一九九六年)一九〇ページを参照。

(11) 注7に記した久留島浩他編『シリーズ近世の身分的周縁』六巻、七五〜七九ページを参照。

(12) 注5に記した拙稿を参照。

付記

小稿は二〇〇一年七月二二日の近世大坂研究会・大阪都市諸階層研究会合同研究会における報告を基に成稿したものである。

二〇〇一年二月刊、山川出版社、三三二ページ、三五〇〇円